

2026 年度全国大会メインシンポジウム《都市住宅学会・日本居住福祉学会共催》
11/28 土 - 2 日目- 15:00-17:15 エフビック大会議室

福島復興の現在地からみる復興の諸相

―地域の復興と生活の復興、その連続と不連続―

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と、それに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故により、双葉町では全町避難を余儀なくされた。震災・原発事故から 11 年余りを経た 2022 年 8 月に避難指示が解除され、町役場も町内での業務を再開した。以降、双葉駅周辺を中心として住宅や生活関連施設の整備が進められ、少しずつ新たな暮らしが始まっている。しかし、震災前に約 7,100 人が暮らしていた町に対し、現在の町内居住人口はなお限定的であり、多くの町民が全国各地で避難生活を継続している。

その一方で、双葉町では、居住と生活の再建に加えて、新たな産業・研究・教育機能を導入することによる復興が進められている。創造的復興・福島イノベーション・コースト構想のもと企業等の立地が進み、本大会の会場となる双葉町産業交流センター（F-BICC）も、産業・交流を支える拠点として整備されている。さらに、福島国際研究教育機構（F-REI）をはじめとする広域的な研究・教育・産業集積との連携も含め、双葉町では、避難者の帰還を基軸とした復興だけではなく、新たな産業、人材、研究・実証機能を地域に呼び込むことによる創造的復興が並行して模索されている。

では、このように多様な主体と活動によって再編されつつある地域を、私たちはどのように「復興」として捉えることができるだろうか。

原発事故から 15 年以上が経過するなか、長期にわたる広域避難を経験した人びとの多くは、避難先で住まいを確保し、仕事や教育、福祉、人間関係など、新たな生活基盤を築いてきた。そうした人びとにとって、「復興」は必ずしも双葉町への帰還のみを意味するものではないだろう。一方、双葉町という空間では、帰還する避難者、新たに移住する人びと、企業や研究機関で働く人びと、町外から継続的に関わる人びとなど、震災前とは異なる主体による新たな地域形成が始まっている。

ここには、「地域・空間の復興」と「人びとの生活の復興」が、必ずしも同じ場所、同じ時間軸で進むわけではないという、福島復興に固有であると同時に、これからの災害復興や地域再生を考えるうえで普遍的な問いがある。

地域の復興とは何をもって復興といえるのか。そこに暮らしていた人びとの生活の復興とは何か。避難先で生活を再構築した人びとと、故郷である双葉町との関係をどのように捉えるのか。そして、新たな産業、研究・教育機能、人材の流入によって形成される地域社会を、従来の「復興」の枠組みのなかにどのように位置づけることができるのか。

本シンポジウムでは、震災・原発事故から 15 年を経た双葉町という「復興の現在地」に立ち、居住・生活、都市・集落、産業・経済、研究・イノベーション、法・人権などの多角的・学際的な視点から、そこに現れている「復興の諸相」を捉える。地域と人、空間と生活、帰還と非帰還、継承と創造の間に生じている重なりと隔たり（連続と不連続）を検討することを通じて、福島復興の現在を問い直すとともに、これからの復興政策と地域・居住のあり方を展望する。

登壇者

趣旨説明：大月敏雄（東京大学・都市住宅学会長）

報告者

☐伊澤史朗（双葉町長）

☐山崎光悦（福島国際研究教育機構・理事長）

☐川崎興太（福島大学）

☐御手洗潤（東北大学）

コメンテーター

☐徳永恵美香（大阪大学・オンライン参加）

☐田中正人（追手門学院大）

☐中川雅之（日本大学）

まとめ：野口定久（日本医療大学・日本居住福祉学会運営委員長）

進行：野村恭代（大阪公立大学）